

新型コロナ期以降の観光の可能性

—パンデミックを超えて

尾家 建生

世界はいま、かつてなく観光客に満たされ始めている。

20 世紀が戦争の時代だとしたら、21 世紀は観光の時代になるのかもしれない。

東 浩紀（あずまひろき）『観光客の哲学』（2017）より

はじめに

本稿は、本学（平安女学院大学）の一回生が入学後、クラス授業の中で副読本として使用する「テキスト」の一部として編集されたものである。したがって、2020 年 1 月にアジアの一地点に始まった新型コロナウイルスの世界的な感染拡大（パンデミック）により引き起こされた未曾有のインパクトについて触れることなしに、本稿を書き進めることはできない。世界を巻き込んだロックダウン（都市封鎖）とステイホーム、ソーシャルディスタンスは世界中の人々の観光行動をストップさせ、観光産業をリセットの状態に陥れた。大学教育は教員・職員と学生、そして学生同士が隔離のままリモート授業を行うという SF の世界さながらの閉ざされたキャンパスとなったのである。しかし、授業は学校側の尽力と学生と父兄の理解とにより、本学では学期スケジュール通りに始めることができ、私の担当する「観光概論」も、学生への本来のオリエンテーションの不十分なまま、また GW を超えれば教室での授業ができるだろうという楽観的な見通しのなかで始まった。結局、新型コロナウイルスの予想以上の猛威は春学期を終える 8 月上旬まで続き、7 月上旬に奇跡的に 1 週間の対面授業で 1 回の講義を行ったものの、あとの 14 コマと試験はリモート授業に終始した。

大学教育はいま、壮大な実験のもとにあると言える。そして、観光産業は深い霧の中にある。しかし、リモート授業を通じて、私は学生の観光を学ぶことに対する冷静な姿勢とコロナ後の観光への期待を感じ取ることができた。観光を学ぶことが、学生に新しい驚きをもたらすことにも気づいた。本稿は、2020 年度春学期の「観光概論」をたどり、観光と人類の関係の部分引用しながら、コロナ禍による観光の変容と「観光とは何か」という問題に触れてみたい。文中の図版は、遠隔授業で用いた PPT からの抜粋である。それとともに、講義での学生の感想を加えた。

1. 人類の移動・ローマ帝国・観光システム

観光学の基礎的学習を教えるにあたり、私は少なくとも 3 つの重要な点を抑えてきた。1 つは、観光行動の本質のひとつに「移動」があり、それはおよそ 70 万年前に、それまでの長い年月をかけて樹上の生活から地上での二足歩行を始めた人類の祖先が、東アフリカから移動を始めたことにある。食料を求め、安全な住処（洞窟）を求め、一族の領地を求め、あるいは他のホモサピエンスと戦い、そして何回かの気候変動を生き抜き、5 大陸に広がっていったという古代人類学では定説となっている

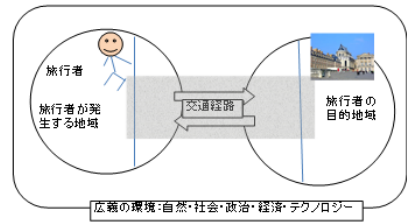
移動を行った。つまり、森林から平原に降り立った猿人の移動こそは人類の進化の始まりであり、誤解を恐れずに言うならば観光の原点でもあるといえる。新型コロナウイルスの感染による現在の観光のシャットダウンは、観光の本質である移動が制限された状況を如実に表わしている。比喩的に言えば、もし移動を始める前に人類が森林で足止めをくっていたらどうなったであろうか。少なくとも、人類にその後の進化はなかったであろう。すなわち、移動は人類の進化の重要な要素となったはずである。もちろん、4月の時点で人類の祖先の移動とパンデミックをここまで関連付けて説明したわけではないが、移動についての考察は観光とは切り離せない。



2 つ目は「古代ローマ帝国」の地図を見ることである。現在のヨーロッパのほぼ全域と北アフリカ、東地中海、小アジアに及ぶ古代ローマ帝国が 2000 年前に存在した。「すべての道はローマに通ず」とはローマ帝国の権力の巨大さのたとえではなく、実際に幹線道路がローマからアルプスを越えてヨーロッパ中に張り巡らされていたこと、また海路により地中海沿岸を縦横無尽に往来していたこと、そしてさらに、現在のスペイン、イギリス、フランス、ドイツの各地に現存する古代ローマ遺跡はまさに、古代ローマ人が建設した水道橋、浴場、円形劇場などが各地に残され、現在、重要な観光遺跡となっていることを知るのである。道路網は、ヨーロッパのその後の馬車輸送のインフラとなる。戦争や交易などの人の移動がいに歴史をつくり、現代の観光とも結びついているかを知ることができる。そして 3 つ目は、観光学が自然科学に対する社会科学の一分野であり、したがってサイエンス（科学）でなければならないということである。あらゆる産業が、学問の基盤の上に成り立っているように、観光産業もまた、観光学の上に構築される。その観光学理論のひとつに、リーパーの観光システム（1979）をあげ、観光という極めて社会的な現象がリーパーの観光システム図とそれを取り巻く広義の環境のフレームワークによってわかりやすく表されていることを、オリエンテーション時に説明しておく。ツーリズム（観光）においては「観光客」が存在する一方で「観光事業者」が存在することを念頭に置くことである。そうすることにより、UNWTO（国連世界観光機関）のツーリズムの定義が説明しやすい。しかし、遠隔授業では対面授業と違って、この点を十分に説明することができなかったという懸念が残った。



観光システムのフレームワーク
(リーパー、1979)



観光産業

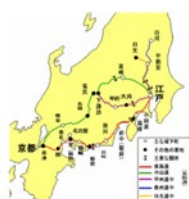
(学生感想) CHI: 私は、印象に残った部分が二つある。一つ目は、人類の移動の歴史は現代において「国際観光」という移動につながっているという点だ。まず、このヨーロッパの歴史の中で起こった移動はどれも世界史の教科書の中で触れてきた出来事だと気づいた。私は今まで、世界史は話の内容が難しいため苦手な教科であった。しかし、今回、難しさを理由に避けてきた世界史と、ずっと学ばなかった興味のある観光とが実は深い関係があったことを知り、高校時代に世界史についてもっとしっかり学んでおけばよかったと後悔した。次に、二つ目は、観光システムのフレームワークの図である。観光を図に表したのを見たことがなかったため興味深かった。また、広義の環境とは観光に影響をもたらす要因であるならば、加えて SNS (ソーシャルメディア) も含まれるのではないかと考えた。例えば、インスタグラムでの写真やハッシュタグ機能からの集客効果など、最近では SNS が観光に与える影響は多いからである。

2. 近代以前の観光 (日本と西洋)

農業により人類は定住し、そこに文明が誕生した。集落は都市を生み、都市は交易の結節点となり、古代王制が誕生し、宗教と聖地が生まれ、人の移動や往来は頻繁になった。古代から中世にかけての「旅」の時代は、産業革命後の近代ツーリズムへの過渡期として極めて興味深い。特に日本の紀行文学に見られる旅人の心情と風景に対する細やかな描写は驚嘆に値する。授業では、「土佐日記」と「東関紀行」を取り上げ、その一部の原文と現代語訳をテキストとしたが、これはやはり教室で読み合わせをしたかった。一方、西洋の観光史はローマ帝国の道路遺産とコンチネンタル (ヨーロッパ大陸) という地理的環境の中でよりダイナミックに発展した。15 世紀イタリアのルネサンスは永く続いた中世ヨーロッパに光を当て、それは詩人ゲーテの「イタリア紀行」にも結晶しているが、何よりも英国貴族の子弟たちによるグラウンドツアーに最もよく反映された。

近世の旅一五街道

1604年、徳川家康は江戸に幕府を開いた早々に主要街道である東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道の五街道に宿駅を制定するとともに、回収を開始、日本橋を起点に諸街道に一里塚を設け、松屋スギなどの波木を植えさせ、渡し船などの整備を図り、後年の弘化大名による参勤交代に大いに寄与した。(出典:『観光学大事典』)



伝馬制
飛脚
関所
「入鉄砲に出女」

英国貴族の徒弟たちのグラウンドツアー



3. 産業革命と近代ツーリズムの誕生

18 世紀後半に端を発するパリを中心としたフランス革命と英国に興った産業革命は、19 世紀に輝く近代史の曙でもあった。宣教師だった英国人のトーマス・クックの物語は、近代ツーリズムのはじまりであり、観光史のハイライトともいえる。やがて世界最大の旅行会社となるトーマス・クック社のミッション（企業使命）は観光により大衆を啓蒙するという壮大なものだった。

当時のイギリスでは労働者は仕事の合間に酒（リンゴ酒）を飲み、赤ん坊が泣くと酒を飲ませてあやし、下の板図（左）のように子供がビール（健康に良いとされた）を飲み、深刻な社会問題となっていた。これはある意味、銃をほぼ自由に持つ現代のアメリカ社会ともどこか似ている。各地で『禁酒大会』が開催され、アルコールの弊害が議論され、宣伝された。宣教師トーマス・クックもそうした活動家の一人だった。

日曜午後の酒場



禁酒大会の様子



出典：本城靖久「トーマス・クックの旅」講談社現代新書：1996

海水浴観光発祥の地は、英仏海峡に臨む英国の都市ブライトンで、1750年が起源とされる。1787年、ジョージ3世の後退しによる離宮建設、取り巻きの有閑人士による快楽生活が、海水浴場の観光地化を促した。以後、19世紀半ばにかけて、英仏海峡の北岸、南岸に多くの海水浴場が開かれる。大衆化を促したのは鉄道の開通で、時間距離の短縮、運賃大幅値下げが、海水浴を庶民の娯楽へと転化した。（参考：『観光学辞典』）

1888年頃のブライトン



現在のブライトンビーチ



1899年建築のバレス・ピア

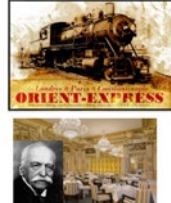


（学生感想）HM：産業革命で蒸気機関が開発され、交通網が発達し、人やモノの流通が盛んとなり、トーマス・クックはそこに目をつけ、団体旅行を企画から運営まで全て1人でこなし、完璧にやり遂げ、お客さんに大好評で、トーマス・クックは観光業での偉人だと思いました。しかも、トーマス・クックは十分な下見をしたり、自らがガイドブックを作成したり、安全性を重視したり、大衆が参加できる値段設定をしたりとお客さん全員に満足してもらえるおもてなしをされていて、将来私たちが目指す観光業においても、他の職業においても、仕事をする上で1番大事なことをトーマス・クックは教えてくれていると思いました。トーマス・クックは子どもたちがお酒を飲み社会問題になっていることから大衆が参加できる禁酒大会ツアーやその時々々の流行に関するツアーを組んでいて、いつもアンテナを張って誰かの為になることをしていて、私の中でトーマス・クックは尊敬する人になりました。

4. 都市の時代

ヨーロッパの都市とリゾートで基盤づくりがされた観光産業は、19 世紀、20 世紀にさらに発展し、現代の国際観光時代へと至る。

人類の進歩を象徴したヨーロッパ観光



①グランドホテル、王侯貴族やブルジョワを顧客とする高級ホテルが1862年パリに建てられ主要都市に広がった。（※1869年）
②外交官、文化人、企業人、旅行者のサロンとなった大西洋横断の豪華客船。タイタニックの悲劇は1912年
③1828年に出版が始まったカール・ベデガー社（ドイツ）のガイドブック
④フランス料理の父と呼ばれるパリ、ロンドン等で活躍したエスコフィエ
⑤スイスのアルプス登山は探検から観光の時代へ
⑥1882年、パリ～イスタンブール間を結んだオリエント急行が運行

アルプス登山 & スキーリゾート

フェルマットの町から望む白峰マッターホルン

「力強いライン川の烈しく泡立つ瀑布、万年雪をいただく峰々の王冠の輝き……その中に作用する創造力が脈々と噴き出にめざめてくる」(1775年、詩人のゲーテは27歳の時にスイスを旅した。(スイスはライン川の源流))
1857年 ロンドンに「アルプス登山クラブ」が設立される。
1862年 オーストリア・アルプス協会が設立。
1865年 英国人パーティーがマッターホルン(4478m)初登攀。しかし下山の途中滑落遭難し、悲劇の初登攀となった。
1869年 最初の女性によるマッターホルン登山。
この頃から山岳が探検から観光の対象となり始める。
産業(サナトリウム)、登山&ハイキング、スキーリゾートへと発展し、山小屋、ホテル、標識のある道、ケーブルカー、ゴンドラ、登山ガイド、救急体制、スキーインストラクター、カニなどが整い、スイスやチロル(オーストリア)は人気の国際観光地となっていた。



1930～40年代のダボスはサナトリウム(高地療法の結核療養所)だった。その後高級スキーリゾートとなり、現在は有名な「国際ダボス経済会議」が毎年2月に開催されている。

(学生感想) TY：現代に伝わるヨーロッパの観光の魅力とは、人類の進歩といえる文化の発展が観光によって体感できることだと私は考えます。人々を多く運ぶことができるエレベーターの発明やエッフェル塔などの高層建築物を完成させることのできる技術力の実現、高級ホテル・豪華客船・海水浴・アルプス登山・スキーリゾートなどの新しい旅の形、当時は時代の最先端であり観光としても新しい時代の第一歩を刻んだ場所なのです。現代の生活に上記の文化は馴染んでいて、現代人は当時の人々が受けた革命的であるという感情を同じように受けることができないかもしれませんが、現代でも通用している（定番となることができた）という証明であるのだと思います。現代世界の礎であり、今でも文化として息付いているものが生まれた土地は人々に歴史を感じさせてくれるのです。

5. アメリカの世紀

私事であるが、2020年6月に封切られたアメリカ映画「エジソンズゲーム」は期待をはるかに超えた感動の映画であった。簡単に言えば、発明家エジソンという偉人が、電球という人類の明かりを発明すること以上に困難であった、一つの街の100個の明かりを一斉に照らすという事業をめぐる繰り広げられる死闘の物語なのであるが、そこで描かれた当時のギラギラしたアメリカ人（といっても多くはヨーロッパからの移民であるが）の電流をめぐるビジネス世界の躍動は圧倒的だった。18世紀から20世紀の時代のアメリカは、観光の面から見ても文句なく面白い。

アメリカの独立、南北戦争から20世紀へ

1775年 東部の13州英国からの独立戦争
1789年 ワシントン初代大統領
1830年 インディアン強制移住法
1846-48年 アメ利カ・メキシコ戦争
1848年 カリフォルニア州に金鉱が発見される。
1861-1865年 南北戦争
1865-1890年 西部開拓時代
1869年 ユニオン・パシフィック鉄道とセントラル・パシフィック鉄道が結ばれ大陸横断鉄道が完成。
1880頃 エジソン、電球の町をつくる。
1904年 ニューヨークに地下鉄。
1908年 フォードがT型モデルを発売。
1926年 最初の大陸横断自動車用幹線道「リンカーン・ハイウェイ」(サンフランシスコ〜ニューヨーク間5422km)制定される。



リンカーン・ハイウェイ
(ワイオミング州付近)

1925年 アメリカ最初のモーター

1920年代にはフォード車の普及によりマイカーでの旅行者が増えたが、安い宿泊を求めて「オートキャンプ」と呼ばれるトイレ、水道付きの施設が生まれた。
1930年代、40年代にはAlamo Plaza Hotel Courts, Best Western や Travelodgeなどのモーターフランチイズチェーンがオープンした。



カリフォルニア州サン・ルイス・オビスポ

(学生感想) HM1：18世紀から19世紀、西洋では博覧会やオリンピックが開催されるなど国際社会の中心であったことと、アメリカは様々な発明がされ、1等国へと進んでいて、日本では鎖国を解き、急ピッチで近代化を進めていた時代だったことがわかりました。フランスでは、今やパリの象徴となっているエッフェル塔が建てられ、そのときに反対する人が多かったことに驚きました。さらに、この頃の西洋は、人類の進化を象徴とする観光の時代で、有名なタイタニックやオリエント急行がこの頃ののものだったことを初めて知りました。英国では、海水浴場が観光地化されるようになり、鉄道の開通で大衆化し、山岳でも探検から観光に変わり、療養、登山とハイキング、スキーリゾートへと発展し、山が整備され、人気の観光地になっていきました。整備されることによって人気の観光地になっていったことがわかりました。また、便利になるにつれ、絵はが

きなど観光地ならではのものが無くなっていくことは残念だと思いました。

AR：前回までのパワーポイントでも思っていました、独立したばかりのアメリカの進み方はとても素晴らしいものであると思います。世界初の郵便為替業務開始や小切手など、新大陸がどうやってここまで発展するに至ったのかとても不思議に思いました。また、観光業務面で海外に事業展開などアメリカの積極性にも驚かされました。アメリカ最初のモーターのイラストは現代に建てられていてもおかしくない容貌ではじめて作られたとは思じがたいほどに素晴らしいものだと思います。他にも現代にも関わりのある内容が出ており、現在の観光の礎がよくわかりました。

6. マスツーリズムと旅行業の発展

1945 年、第 2 次世界大戦が終結すると米ソのイデオロギー対立が深刻化するものの、表向きは平和な時代が訪れた。戦勝国のうち米国、イギリス、フランスの各国民は競って観光に出かけ、バカンス客を乗せたチャーター便が西欧諸国の都市から地中海へ、米国都市からカリブ海やハワイへ飛び、マスツーリズムの時代を迎えた。そして敗戦国の日本、ドイツ、イタリアも奇跡と言われた経済復興により、1960 年代にはその仲間入りをし、国内旅行が盛んに行われ、旅行業が急成長した。マスツーリズムは、急増する観光客を満足させる世界の観光産業の「ベスト・プラクティス」（最高の経営実践）であった。

2. 日本人の団体旅行

戦後の日本でいち早く復活した旅行

- ・修学旅行
- ・新婚旅行（熱海や九州）
- ・宗教団体参拝旅行

1960 年代の高度経済成長期を経て家庭に「三種の神器」と言われたテレビ、洗濯機、冷蔵庫がそろった消費は休暇旅行やレジャーに向き始め、日帰り旅行（遊園地、海水浴、登山など）と宿泊旅行（温泉旅行、名所旧跡巡り、スキーツアーなど）に国民は憩安を求めた。

1962 年、尼崎に住む堀江謙一青年のヨットによる単独太平洋横断や西宮出身の小田実の旅行記「何でも見てやろう」は旅への夢をかき立てた。

70 年代に入ると団塊世代の北海道カニブーム、沖縄の返還（1972）により旅行需要は高まり、国鉄の「ディスカバー・ジャパン」での中高年夫婦向けキャンペーン、雑誌「アンアン」[ノンノ]による若い女性向けの小京都ブームなど、旅行マーケットは世代別に分かれ始めた。

団体旅行の功罪

1960 年代から 70 年代にかけての日本のマスツーリズムを支えたのは「団体旅行」であった。企業の職場旅行、社員研修、招待旅行、接待旅行、金融機関の積立旅行、業界団体、政治講演会、宗教法人、会員組織などあらゆる分野で「結団団体」が活動し、日本復興の原動力となった。そうした団体が団結するためには、旅行は最も効果のある手段だった。温泉地では団体客の需要に対応するための大浴場、宴会場、二次会施設、お土産売店などの完備した「大型観光ホテル」が続々と建てられた。国民が平等に観光を楽しめる社会において団体旅行が日本経済の原動力となり牽引力となったのは間違いない。



1960 年熱海にて（出典：朝日新聞）

5. 70 年代に空の旅を変えたテクノロジーと航空行政

アメリカの週刊誌 TIME
1971 年 7 月発行



1970 年、B747 ジャンボジェット機の就航
アメリカの若者が海外へ。

同 1978 年 8 月発行



1978 年、米国で「空の自由化」始まる。
路線、運賃、フライト数などが規制緩和され、2 年後にヨーロッパが続く。

7. 着地型観光と DMO

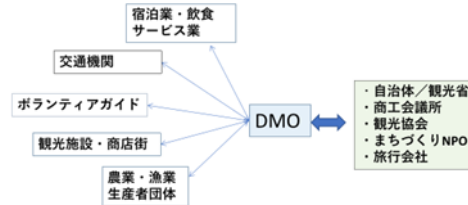
農業革命、産業革命に次ぐ第 3 次革命と言われる情報通信技術（ICT）革命は 1995 年に始まったインターネット元年により加速的に社会を変えて行った。特に「旅行は情報だ」とも言われていた旅行産業において、インターネットによる予約システムは、旅行の準備そのものを画期的に変えた。宿泊や交通の予約をインターネットを利用すれば、いつでもどこからでも予約ができ、かつ決済（支払い）のできる時代になった。着地型観光は、インターネットにより実現した、地域からの旅行企画の発信であった。

■2007年 堺伝統産業ものづくり体験ツアーの事例

大阪市の南部に隣接する堺市は臨海工業地帯と大阪のベッドタウンとして知られるが、中世に明との貿易や自由都市として栄えた歴史都市であることは知られていなかった。観光工芸エッセンス協会(当時)は市内に点在する伝統産業に基盤とし、匠・職人・職人・匠・職人の集まる高規格型ツアーを開発し、市内の旅行会社を通じて参加者を募集した。各設定日はいずれも定費で実施され、堺が伝統産業の町であることが印象付いた。現在は各団体の観光客も訪れている。



3. DMOのプラットフォーム機能 (デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション)

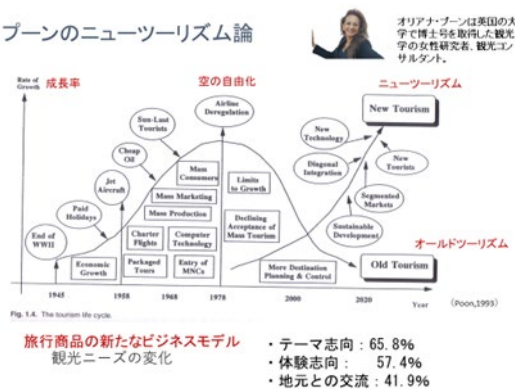


・地域の問題解決、ブランドづくりとしてのツーリズム。
・従来の観光地ではない地域が観光に取り組む。
・住民参加のまちづくり活動である。

8. ニューツーリズムとeコマース

80年代に入ると環境意識の向上、個人化、原油の高騰、空の規制緩和、ITC革命などによってマスツーリズムは変化を迫られた。旅行者の志向や意識は変化し、団体運賃を使う必要のなくなった個人マーケットは、ニューツーリズムへ移行した。

2. プーンのニューツーリズム論



旅行商品の新たなビジネスモデル
観光ニーズの変化

・テーマ志向: 65.8%
・体験志向: 57.4%
・地元との交流: 41.9%

『レジャー白書2007』より

■Eコマースの黎明期

Jeff Bezos



1995年、それまで大学・研究機関と密に使用していたWebが民間に開放され、インターネットの時代が始まった。ニューヨークの投資機関で金融工学をやっていたジェフ・ベゾスは、インターネットを利用した書籍の通信販売を始めるため、車でシアトルへ向かった。横断の4日間、車は美さんが運転し、彼は後部座席で新食の設計に集中した。

- ・1995年「J. ベゾス、書籍販売のeコマース「amazon.com」を創業。
- ・マイクロソフト社、Expediaを設立。・GDSのセイバー社はTravelocityを設立。
- ・米国の5大エアライン、共同で旅行サイトOrbitz社を設立。
- ・1996年、日立造船コンピュータ(株)は「ホテルの窓口」でインターネットでのホテル予約業務を始める。1998年「旅の窓口」へ。(ビジネスマンの出張市場を担い、事業は急速に拡大)
- ・1996年、飲食店検索サイト「ぐるなび」創業。前身は駅構内の広告を扱っていた。
- ・ヤフー・ジャパン、プロバイダーのサービス提供開始。路上でモザムを無料で配りネットは普及。
- ・1997年 三木谷浩史、インターネット・ショッピングモール「楽天市場」を13店舗で開設する。1店舗の出店が月に5万円だった。
- ・1998年「Google」スタンフォード大学の博士課程に在籍していたラリー・ページとセルゲイ・ブリンによって創業。検索が他のプロバイダーに比べめっちゃ早くかつた。
- ・1999年 森正文、高級宿泊予約サイト「一休ドットコム」を開発。彼は生保に勤めていたが、夜の新宿のホテル群の明かりがついている部屋と消えている部屋があるのを見て、消えているまだ売れてない部屋をネットで売ることを見つけ、高級ホテルに特化し、大成功する。

(学生感想) NAR: 現代における旅行の楽しみ方は多種多様である。情報がすぐ手に入ることはもちろん、観光情報をその観光地域の人々が発信出来るようになるなど、インターネットの普及は観光事業に大きな影響を与え、また、交通網の発達により交通手段の選択肢が増え、個人のニーズに合った旅が出来るようになったことが分かった。旅行会社の特権であった旅行ツアーは、今や個人の力で個人が作り出せる。だから今は「発地型観光」から「着地型観光」に変化していることを知った。確かに、観光地周辺に住む人々や事業者の方がその地のことを知っているし、地域連携によって観光産業がより活性化すると思った。DMO はそういった意味で、良いように機能すると思う。地域そして様々な組織が一体化となり、誘客促進と経済の活性化へ繋げる方法となるからだ。「DMO」という言葉を聞いたのは初めてだったけど、何となく理解することが出来たので、もっと深く知るために様々な事例を探してみたいと思った。

※DMO: デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーションの略。2020年10月から観光庁は「日本版DMO」を「観光地域づくり法人」へ改称している。

9. 農業×観光 グリーンツーリズム

1980年代の個人旅行への志向は90年代に入ってより明確となり、名所旧跡を巡る「見る」観光から個人の趣味や関心を向上させるツアー、非日常ではなく日常の生活を豊かにするツアー、学び交流するツアー、体験観光へと変化した。例えば、修学旅行を例にとると伝統的な京都・奈良観光や箱根・東京観光から、信州でのスキー体験ツアーへ、さらに沖縄・広島への平和学習ツアー、農家滞在での環境学習ツアーへと変化していった。

3. 学生たちのグリーンツーリズム体験

鳥取県鳥取市から車で40分の鬼入道に「うどう」地区の農家民宿は「鬼入道グリーンツーリズム研究会」が2009年に発足し集落で取り組み、事務局長の乾が町長さん(当時)が取り仕切っている。ここに大阪の大学生が初体験になった。

「グリーンツーリズムを体験するにあたって、はじめは少し緊張がありました。山の中は虫が多いし体力を使うような事をせずにゆっくりしたいということが最初に頭をよぎりました。」(ひかり)

「僕は正直な所グリーンツーリズムで鳥取にある鬼入道に行くというときは、ほとんど関心がありませんでした。もっと観光名所に行きたいくらいに思っていました。実際に来てみて、本当に田舎の民家に泊るんだな、まあまあ楽しそうだしプラスからはいいかな。」(悠紀)

しかし、鬼入道に着いた瞬間その考えは消えました。周りは緑ばかりと違って木々や草花の大自然で空気が清々で驚きと同時に、とても癒やれる場所もあり、癒されました。」(ひかり)

1日目は乾さんと副会長の谷口さんが予約体験してくれました。この体験は、竹やぶに行き竹を切るところから始まりました。

「鬼入道に着いて、はじめに家におじゃまさせていただきました。少し休憩してから、道路の脇にある竹を切って、竹の節の間に、太い竹が通ってみんなでもって歩いて帰る。青春みたいでした。」(悠美)

「山に切り竹を切るのも竹を加工するのも自分では想像と夢中になっている自分がありました。ブルーベリーや木苺もあって自然にあるものを調理せずに食べることに抵抗はありましたが、食べてみると美味しかったです。」(ひかり)



4. イタリアのアグリツーリズム

ヨーロッパで農業に由来する農村観光は一般的にはもう一つの観光(Land tourism)と呼ばれるが、イタリアにおいては農業を意味するアグリ・ツアーズと観光(イタリア語でツーリズム)を組み合わせたアグリ・ツーリズムという言葉が使われている。

アグリ・ツーリズムも日本の農業観光と同様にイタリア全土に存在するが、特に、東部の農業観光とワイン、料理で世界的有名なスカーパ州には2000軒ものアグリ・ツーリズムの宿泊施設がヨーロッパからの観光客を中心に受け入れている。

アグリ・ツーリズムの多くは、オーナーが家族経営、ワイナリー、オリーブオイルの製造に足を踏んでいる人も少なく、見学することができる。場所によっては観光客は農家を訪ね、自然に「自然に」農産物を消費する。ファミリーやカップルでの滞在客が多い。家族やワイナリー、オリーブの観光客、本格的なグルメ・レストラン、観光客の滞在が、



アグリ・ツーリズムは1980年代から発展し、観光客が急増。今や、イタリア観光のトレンド(魅力)のひとつとなっている。ヨーロッパの観光客は伝統的に位置するスカーパ地方は、農業の観光客にとって観光にも便利な地域だ。



(学生感想) CHI：授業を通じて、やはり体験するということがいかに大切かという事を思い知らされた。特に、グリーンツーリズムの中での大学生の感想は興味深いもので、私は祖父母が農家をしている影響で昔から野菜の収穫や田植えなど自然に触れあってきたため、同じ世代なのに「虫が多いから」「関心がなかった」という声があったことが驚きだった。しかし、実際に体験をした後には楽しかったことや驚いたことがいきいきと述べられていて、彼らのグリーンツーリズムへの考え方が変わっていたのだ。これは、とても素敵な例だと思う。このように体験する前の偏見から魅力を感じることができずにいるもったいない若者が大多数であろう。そこで、私は今がグリーンツーリズムを若者に強く勧める絶好の機会だと思う。自粛期間の退屈な毎日に、グリーンツーリズムの非日常体験は刺激的であり、より若者が興味を持ちやすいからだ。コロナによるグリーンツーリズムの発展を期待している。

10. 多様化する宿泊

宿泊施設は、一般には観光資源というよりも観光施設として分類されている。駐車場や飲食店、休憩所と同様に、それが観光の目的にはならないからだ。しかし、1日24時間のうち少なくとも10時間を過ごす宿泊施設は、現代のツーリズムでは、旅のスタイルを決める重要な観光資源のひとつになったと言える。テクノロジーの発展とコミュニティのネットワーク力がさまざまな宿泊サービス・宿泊体験を提供している。

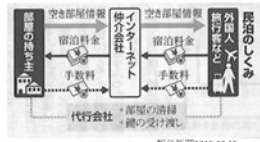
宿泊仲介サイト：航空業界と同様、業にイノベーション（技術革新）を迫っているホテル業界だが、2008年に設立されたAirbnb（エアビーアンドビー：略してエアビー）という異変があった。名前の企業ネット上での登録は衝撃的だった。同社はホテルを1軒も保有していないが、獲っている宿泊施設「民泊」は、日本に進出した2010年にはすでに100万部屋を超えていた。



おかえりなさい
1902年開業の老舗旅館、旅のついでに温泉も！
Airbnb (Airbnb.com)

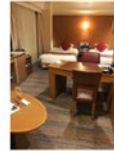
2008年 e-Bay（日本のカカクコムのような会社）出身のブリア・チェスキーがサンフランシスコで起業。自らホテルが取れずに友人のリビングに泊まった時、宿泊先を探る旅行者と部屋を貸したい人をつなぐビジネスを思いついたという。2009年、最初の出品者が200万円を投資するが2万円の売り上げが続き半年でNYCの宿泊先の素人写真家のプロの撮影に変わった。1週間後から収益が倍に増える。2010～2011年、投資相次ぐ。世界中で100万以上の部屋に拡大。2013年、Oneが計算してみるとひとと就5万～6万の宿泊として年間75億円の手数料が、宿泊者と部屋の持ち主の間から彼の口座に自動的に入っていた。

いきなり飛び込んでくる「おかえりなさい」のコピーは、背景の写真からパリの街角のカフェであることが分かるが、あなたはパリの街にこれから「旅行に行く」のではなく、パリの「家」にもどるのである。なぜなら、今から予約する宿泊は地元の人々の住む「民泊」なのだから。



宿泊特化型ホテル

宿泊に特化し、レストランや土産物屋をおかない部屋だけを備えたホテルのことで、沖縄のようなリゾートには少なくないタイプのホテルであったが、最近、機水ハウスがマリットホテルと提携して、道の駅に隣接する場所でも全国的に展開している。ビジネスホテルとの違いは、部屋のスペースがゆったりとした滞在型ホテルとなっていること。館内にレストランや土産物屋がないことで、食事や買い物はその地域のお店に行くため、周辺の地域経済の活性化が期待されている。



クラウドホテル「SEKAI HOTEL」

「旅先の日常に飛び込もう」
空き家の解決を軸に国際観光客を創造
中古住宅リノベーションのクラウド株式会社（本社：大阪府北区）は、大阪府下のベンチャーと数社と、大阪府北区西九条一丁目地区の中古住宅や中古マンションの一部をリノベーションによって再整備し、訪日外国人観光客や国内観光客向けに宿泊施設や様々なアクティビティを提供する「SEKAI HOTEL」のサービスを2017年6月より開始した。

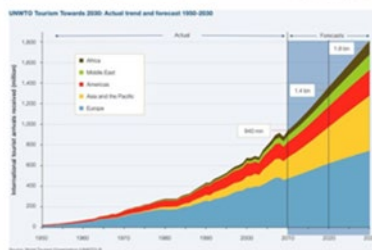


11. 観光の成長と持続可能性、そして宇宙旅行

観光客（ツーリスト）は3つに分類することができる。国内旅行（ドメスティック）、海外旅行（アウトバウンド）そして訪日旅行（インバウンド）である。国内旅行は経済的には「内需」（国内の需要）になり、海外旅行は貿易の「輸入」にあたり（日本人が外貨を支払う）、訪日旅行は「輸出」（外国人が外貨を支払う）にあたる。したがって、国の貿易収支として邦人の海外旅行は赤字に相当し、訪日旅行は黒字に相当する。昨今のインバウンドの増加は、貿易的には黒字を増やし、日本経済に多大な貢献をする。さらに、最後に究極の観光旅行？宇宙旅行を展望して締めくくる。

1. 国際観光の成長

1950年に始まる下のグラフは、全世界の国際観光客の人数の推移を表したものである。1985年以降、アジア諸国とBRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国）の世界的な経済成長により、国際観光は目覚ましい成長を遂げてきた。2000年以降の多少の減退はニューヨーク多発テロやSARS、リーマンショックによるものであるが、回復は早く2030年の18億人の予測に向けて順調に成長を続けていた。2018年には欧州が50.8%、アジア・太平洋が24.9%を占め、特にアジアの成長が著しい。しかしながら、この成長は新型コロナウイルスにより2019年で終わり、2020年の予測の14億人は大幅に落ち込むことになる。出典：UNWTO（国連世界観光機関）



スペースX (SpaceX) 社：
米軍のイーロン・マスク氏によって、2002年に立ち上げられた宇宙企業。小型ロケットの開発に始まり、現在は大型ロケットの打ち上げを専攻として、NASAや世界各国の衛星などを打ち上げている。最大の特長はロケットが再使用できることで、これにより打ち上げコストの大幅な削減に成功している。さらに月や火星への有人飛行や移住という大きな構想も掲げ、すでにそのための巨大ロケットの開発も進んでいる。



スペースXクルードラゴン 2020年6月1日、同社のファルコン9ロケットで打ち上げに成功。185人の乗客に乗った。スペースXとボーイングは現在、国際宇宙ステーション (ISS) への有人ミッションを開始する。NASAの野心的宇宙飛行士が国際宇宙ステーション (ISS) に長期滞在する予定。

ヴァージン・ギャラクティック (Virgin Galactic) 社：米軍のリチャード・ブランソン氏によって、2004年に立ち上げられた宇宙企業。サブオービタル飛行ができる宇宙船「スペースシップ2」を使って、宇宙旅行ビジネスを行うことを目指している。2014年には試験中に墜落事故を起こし、しばらく営業していたが、早ければ2020年中の実現を目指している。



スペースシップ2 ロケットエンジンで高度100キロを超えて飛び、数分間の無重力を体験して戻る。乗客は25万ドル（約2000万円）で、世界で約700人が予約している。

ブルー・オリジン (Blue Origin) 社：アマゾン.comの創業者としても知られるジェフ・ベゾス氏によって、2000年に立ち上げられた宇宙企業。サブオービタル飛行ができる宇宙船「ニュー・シェパード」を開発しており、早ければ今年中の宇宙旅行の実現を目指している。またオービタル飛行ができる大型ロケットや宇宙船、さらに月の移住に向けた宇宙船の開発も進めている。



ブルー・オリジン 宇宙船をロケットで垂直に飛ばし、パラシュートで降りてくる飛行を計画。試験に12回成功しており、年内にも乗客乗を発売しようとしている。

宇宙旅行をめざす3社一基地は米国

（学生感想）NAR：コロナが流行する前は、観光地に多くの外国人観光客が訪れており、日本がずっとインバウンドに力を入れていると思っていたので、初めは、日本がアウトバウンドの状況だったということに驚きました。観光業に力が入っている今、オーバーツーリズムは重要視すべき問題だと思いました。日本の経済のために、観光客を多数受け入れたい反面、近隣住民への配慮もしなければならない、ゴミ問題や言語問題など考えるべき点は様々あると思いました。全て解決するのは時間がかかるかもしれないが、コロナが収まり、国際観光が活発になった時、日本にたくさんの方が来ると思うので、それに備える案が必要だと思

ました。私が幼い頃は、宇宙は未知であり、行けるのは宇宙飛行士だけだと思っていましたが、宇宙旅行が民営化するかもしれないと言われ始めた時はほんとにすごい世の中だなと感じました。宇宙旅行が新しい旅行の形となる日が来ればいいと思います。

まとめ パンデミックを超えて

観光の歴史をたどることは、私たち現代人を知ることでもある。「観光は何のためにあるのか」という議論は、従来、あまりされてこられなかった。しかし、コロナパンデミックを経験した私たちは今、観光の意味を考えざるを得ない。

観光についての思想を最初に持ったのはおそらくトーマス・クックであろう。トーマス・クックは「旅行によって大衆を啓蒙し教育することができる」という強い信念を持っていた。観光は「人類の進歩を推し進めるための媒介」であり、「豊かさとしに満ちた神の造られた地球は、すべての人々のためのものである。そして鉄道と蒸気船は科学の進歩の成果であり、すべての人々のためのものである」が彼のミッションであり、大衆の啓蒙こそが 19 世紀から 20 世紀における観光の社会的使命であると信じた。そして 21 世紀の今日、トーマス・クック社は倒産により 178 年の長い歴史を閉じた。次の時代の観光の役割は何であろうか。アメリカの社会学者バーガーはこう述べている。「われわれが旅をする機会は、おそろしく増えてきたが、その結果、われわれは少なくとも潜在的に、自分の文化を、その基本価値を含めて、時間的にも空間的にも相対的なものであると意識するようになった。」（バーガー 1963、p.73）。バーガーは旅行のもたらす相対性を指摘する。「古代にまでさかのぼってみるならば、人々の視野が世界に対して開かれ、そして他に存在する思考様式や行動様式に対して解放されていったのは、都市においてであった。」（同 p.78-79）「都市文化を特徴づけているものとして、世界市民主義の意識なるものを確認することができる。単に都会的というだけでなく都会的に洗練された個人とは、たとえ自分の住む都市にどれほどの愛着を覚えていても、知的世界を航海する時には世界中を自由に徘徊する者のことである。」（同 p.79）バーガーの言うように、1960 年代以降の国際観光の興隆には、こうした「相対化」や「世界市民主義」を示唆するものが含まれている。グローバリゼーションの先に、コスモポリタニズム（国際市民主義）を見ることは妥当でもある。

哲学者であり評論家の東浩紀は 2017 年に出版した『観光客の哲学』で、人を村人、旅人、観光客の三種に分けるという興味のある分類を行っている。いわく、村人は共同体のウチで生活し共同体を出ない人、旅人は生涯、共同体のソトを旅し続ける人、そして観光客は共同体には住むが、共同体のソトを目的もなく無責任に観光する人、といった具合である。彼は哲学的思索により、「人間が豊かに生きていくためには、特定の共同体にのみ属する『村人』でもなく、どの共同体にも属さない『旅人』でもなく、基本的には特定の共同体に属しつつ、時折別の共同体も訪れる『観光客』的なありかたが大切」（東浩紀、p.14）だと主張するのである。ただ彼の思索はヘーゲル、カントからアーレント、デリダまでの哲学理論の援用によって導かれているので理解は困難である。しかし、ここに前述のバーガーの都市文化論へと結びつくものがあるように思われる。

観光は何のためにあるのか。コロナ禍にある今、あえて答えるならば、それはウェルビーイング well-being のためでないかと思う。well-being とは一般に happiness and health 幸福と健康の意味がある。感情的、身体的、心理的な幸福と健康、そこには快楽的な状態も含まれるであろう。そもそも余暇の目的には幸福と健康が含まれていたはずだが、観光に求めるものが幸福と健康であるということは、

観光が不要不急のものとは限らないことを示している。私たちは共同体に閉じこもる村人であってはいらない、また、生涯を共同体の外で過ごす旅人であってもならない。観光客であることが、幸せであり健康であることにつながるとも考えられるのだ。パンデミックは克服されなければならない。（了）

【参考文献】

- ・ 本城靖久『トーマス・クックの旅—近代ツーリズムの誕生』（講談社、1996年）
- ・ P.L.バーガー『社会学への招待』（水野節夫・村山研一訳、新思索社、1995／1963年）
- ・ 東浩紀『ゲンロン0 観光客の哲学』（ゲンロン、2017年）

（おいえ たてお 平安女学院大学国際観光学部）